

第14回 日能研

文学コンクール

最優秀賞

【創作文】stand by…

京都市立西京高等学校・一年

高田 悠生さん

作品に対する思い・感想

この度は、私の作品に『最優秀賞』という素晴らしい評価をしていただけたことを、とても嬉しく思います。読書好きが、読み手から書き手に挑戦した三作目になります。

『再生』をテーマに物語を作りました。大きなテーマにも感じますが、実際身近なところにも、たくさんの再生の物語が存在しています。深い悲しみや、大きな失敗で、もう立ち上がれないと思ったそんな時に、この作品を読んでもらえたら幸いです。

街全体で景観を守っているこの地域において、珍しく存在感を放つある高層マンション。近隣住民から一目おかれているその立派な建物には、富裕層と思われるファミリーが多く居住していた。

それは朝の出勤時間の様子を見れば一目瞭然だ。カツカツと硬い音を立てる磨きたての革靴。羽織られたコートは朝陽を浴び、ウールの光沢を一層美しく放っていた。嫌みのない品のあるスタイルの男女が、ホテルのロビーとも見間違えるほどのエントランスから次々と出かけていく。ある意味このマンションに住んでいること自体がステイタスと呼べるものなのだろう。

ビル風が舞うまだまだ肌寒い2月、この場所には似つかわしくない格好をした男が、肩をすぼめながら不機嫌そうな表情でマンションエントランスから出てきた。

防寒を重視したのだろう。センスなどは度外視した迷彩風のフード付きロングコート。もう何年も洗われていないのではないかと思われる。そして頭には使い古されたグレーのニット帽を目深にかぶり、その男も勤務先に向かうべく駐輪場に向かっていた。先の居住者は車が置かれた駐車場に向かう中、使い古した自転車にまたがりタバコをくわえた。

「フゝ、今日も寒くてやっつけられないな。」

煙をふかしながら自転車を漕ぐべく、足にゆっくりと力を入れたのだった。

佐伯達郎44歳。警備会社の契約社員。自宅から自転車で20分ほどの距離にある事務所に10分程で毎日到着している。朝、少しでも長く布団で寝ていられるように朝食はとらない。通勤時間も自転車を猛スピードで漕ぐことで10分縮めている。目覚めてから会社の自分のデスクに腰をおろすまでに30分もかからない。余裕をもって仕事を始めることなどはこの男には無縁と思われた。

毎日パソコンの前で、ここから派遣されている警備員の給料計算やら、各種事務手続き等の書類を用意するのが彼の仕事であった。

さほど大きくないこの事務所には、経理だの人事だのそんな垣根はない。もう一人の若い正社員の女事務員と二人で充分こなせる仕事量であった。平日8時半から5時半まで残業少々。

月に手取り20万がいいほうで、少ない月は15万くらいになる時もある。契約社員のため一年更新。基本何もなければそのまま更新されるという話だが、そんな口約束は、この不況下なんの役にも立たないことを十分知っていた。今日も漫然と仕事をこなしている佐伯の背中に向かい、スーツがどうも身長とつり合いが取れていない小太りの社長が声をかけたのだった。

「佐伯君、ちょっと。」

「…またか。」

そう思いながら、社長室とは名ばかりの薄い扉の向こうに、重い足取りで佐伯は足を踏み入れたのだった。

「またですか？」

「そうなんだ佐伯君、悪いねえ。」

この会話を何度繰り返してきたことかと、思わず数えてみたがそんなことに頭を使う事すらバカらしくなりやめた。

「最近の若いやつは長続きしなくてねえ。」

社長がその短い脚を無理に組んでいる姿が滑稽にうつる。

「わかりました。退職の手続きを早急に進めますね。」

佐伯は話も半ばに社長に背を向け自分のデスクに戻ろうとした。

「ちょっと。話はまだここからで…。」

あわてて社長は組んでいた脚をほどこき椅子から立ち上がった。

「えっ？何ですか」

いつもとは違う展開に佐伯は少し戸惑い、もう一度社長室の中に足を踏み入れグツと目を見開き話の続きを聞くことにした。

「いやねえ。続かないには訳があるんだよ。あそこはねえ。なかなかねえ…。」

社長の口ごもった話し方に、イラつきを覚え思わず声を荒げた。

「だから、なんなんですか？」

若い従業員の仕事が長続きせず辞めていくことは珍しくない。いつもそれにつき合われて、事務手続きが増えることも、もうこの仕事を始めてから何回も繰り返してきたこと慣れていて。ただ社長の言う あそこ という言葉には引っかけかきがあった。

「何か問題のある現場なんですか？仕事が続かない原因がそこにあるのですか？」

早く本題に入れよと言わんばかりに佐伯は社長に話の続きを促した。

「あそこ。あそこなんだよ例の事故現場。」

社長は重い口調で話し出した。

「あそこの警備の仕事自体は、簡単でどちらかというとなかなか楽な仕事なんだよ。ただ立ってればいいだけなんだから。でもさ、精神的にキツイっていうかさ。色んな人にイヤな言葉を投げかけられるみたいでさ。サンドバック状態になるんだよ。」

そこまで話すと社長は深いため息を吐きタバコに火をつけた。

「一度現場を見に行ったことがあるのだが、あれはちょっと若いもんには無理かもしれないなってさ。だって…人殺しの会社から金貰って仕事しているお前はどんな気持ちだ！だもんな。」

ようやく佐伯はどこの現場の話なのか理解できた。

事故現場。乗客乗員83名死亡。600人余りが重軽傷を負ったあの列車事故の現場だった。

事故調査のため、現場保存は必至で昼夜問わず警備が必要とされていた。しかし遺族からしてみれば、その現場に来て手を合わせると同時に、その事故を起こした鉄道会社への怒りが一層こみ上げてくるのは無論のことであった。

そこで怒りをぶつける相手として、無言でその現場に立っている警備員にどうしても目が向いてしまうという訳だ。

ただ現場に立っている警備員はその鉄道会社の社員ではなく、その鉄道会社から委託された警備会社の社員である事はあまり知られていない。とはいえ、間接的にその鉄道会社から雇われているには変わりないのだから仕方ない。

その非難や怒りを一新に受け続けることが耐えられなくなり、その現場だけではなく警備員としての仕事にも嫌気がさし、若者は辞めていってしまうのだろう。ただその話を私にしてどうしようと社長は思っているのか？佐伯に鈍い予感が走った。

「佐伯くん、お願いできないかな？」

予感的中した。

誰が辞めようが、何人辞めようが、その仕事は存在する。だから、誰かがやらなければならぬ。佐伯には社長の思惑が理解できた。簡単なことだ。辞めても他にいくらでも仕事のある若い奴は、わざわざこんなサンドバック仕事を選ばない。ただ佐伯のように年齢もある程度いつているにもかかわらず、社会からドロップアウトした人間は仕事を選ぶことはできない。

今、目の前にある仕事を今日、明日、食べていくために行う。ただそれだけの毎日を通じている佐伯という男。ある意味絶対に辞めない保険保障付きの便利屋というわけだ。佐伯は自分を納得させるためだろうか、それとも元々そんなプライドなどは持ち合わせてなかったのか、フゥッと大きく息を吐いた後、淡々と社長の説明に耳を傾けていたのだ。た。

「三興不動産に打ち合わせ行ってきましたね。」

男は細身のネクタイをきっちり締め直し、デスクで使用していたものとは違うシャレた眼鏡に掛け替え、社を後にした。

「決めてやるぞ。」

そんな自信に満ち溢れた表情で軽やかに車のエンジンをかけ、15分足らずで取引先に到着する。三興不動産の広報の副島が用意した小さめの会議室で男は持参したデザイン画を広げたのだった。

「はっきり言います。今回はデザイン性を重視しています。広告じみた広告には富裕層は魅力を感じません。イメージを前面に打ちだしてアピールしています。」

副島が意見する前に男は先制パンチをくらわした。

「やだなく。先にこっちの言いたい事言っちゃうんだもん。そうきちゃいましたか。」

副島がデザイン画を手で動かしながら様々な方向から眺める。

「確かに斬新でいいデザインなんですけど…マンシヨンの写真、さすがに小さくないですか？」

だが男は一步も引かない。

「そう言われると思って、写真の大きさを変えたパターンを用意させてもらいました。比べて見てください。どちらがグレードの高い物件に見えますか？」

机の上に何パターンかのデザイン画が並ぶ。一瞥した後、副島が口を開く。

「確かに・・・。」

男がまた攻める。

「このマンシヨンのクオリティーはちゃんと裏面で詳細にわたって説明できています。この表の、表紙のイメージから顧客の頭にイメージを膨らませ、そしてそのイメージを裏切らない物件だということを伝えきる。そんな広告にしたいのです。」

「なるほど。よく分かりました。弊社の出した規格とは少し異なりますが、私が上を説得してみましよう。確かにこの広告は斬新で胸に響くものがある。」

副島が納得した時のクセ、アゴをなでるポーズがでた。

「決まった。」

男は確信した。

社に戻ると一連の報告を済まし、男はまたパソコンの前に腰をおろした。

この男の仕事は広告デザイナー。と言っても、会社員でありながら仕事の体制は全くの自営業である。個々のデザイナーに直接名指しで仕事が舞い込む。そしてそのデザイナーが一人で打ち合わせ、企画立案を行い、自らデザインした作品を売り込むという形だ。

依頼主は大きな広告代理店に発注するよりもスピーディーに仕上がるこの会社のシステムを好んで発注してくる。同じデザイナーを選ぶことで一貫した広告がうてるわけだ。そして多くの人間を挟むことなく作業を行うため細かな指示が出せるといった利点もある。デザイナー側もひるむことなく発言ができ、自身の得意な分野でのデザインを多くに広める場が与えられ、生き生きと仕事ができる。

ただしここは実力の世界。名指しで仕事が入らなければ、ただのアシスタントとして固定給働きするしか道は残されていない。

その中においてこの男はいつも売上トップ級。インセンティブでの収入が充分独立を可能としているのだが、固く会社員としてのデザイナーの道を選び働いている。それは、妻と息子の存在だった。安定を求めていることだったが、男は今の状況にとっても満足していた。

幸福感も十分に感じていたのだった。

「これ、パパが作った広告だよ。すごいね〜！」

朝陽が優しく差し込むリビング。土曜日の新聞に大量に挟み込まれたチラシの中から、迷わず男のデザインした広告を見つけ出し、息子に見せる妻の姿があった。

「ピカピカのマンション。きれいだね。パパが造ったの？」

息子が舌足らずの甘えた声で問いかけている。

「マンションをパパが造ったわけじゃないんだけど、この広告に写真載せて、きれいに仕上げたのがパパなんだよ。」

男は息子をそっと自分の膝の上に乗せ話を続けた。

「この広告を見て、このマンションに住んだらきっと幸せな未来があるんだろうなあって思っ、多くの人が見に来てくれるようにパパは一生懸命考えてこの広告を作ったんだよ。」

息子の頭を撫でながら、優しい声で話す男。

「へ〜すごいなあ。た〜くさんの人が幸せな気持ちになれる広告を。パパは作ってるんだあ。かっこいいなあ。」

息子はキラキラした瞳で男の顔を見上げたのだった。子供ながらに男の仕事を理解し、慕うその姿は、男にとって何にも代えがたい愛おしいものであった。

今年で五歳になる息子は妻に似て色白で、笑うとかわいいエクボが頬に顔を出し、可愛さがまた一段と増すのだった。職場結婚した妻は現在専業主婦となっており、仕事はしていなかったが、男のデザインの才能に深く尊敬の念を抱き、家庭を守ること、男の仕事のアシストができるようにと務めていた。

「来月、精華町の角の大きなビルの壁一面に、俺の作った広告看板が出るんだよ。」

妻に少し照れながら伝える男。

「へ〜すごいじゃない！見たいわ。絶対に見たいわ。」

「来月、パパの作った大きな広告の看板が出るんだって。見たいよね？三人で見に行きましようね。」

息子に話しかける妻の顔には、一瞬にしてそれは美しい花が咲いた。

「ついてないな…。」

佐伯は溜め息をついた。それは現場に立った初日の今日が、運悪く事故日（月命日）に当たっていたのだ。どんよりと雲が重く沈むこの日、遺族の多くは献花しに、そして亡くなった大切な人と対話しに、この場所に足を運んだ。そして悲しみに暮れたその瞳は、無表情でこの場所に立つこの佐伯にも向けられた。無言の棘が佐伯を襲う。そしてその均衡を破り誰かが声を発した。

「前にいた人また辞めたのかい。そりやそうだろ。普通の神経を持っていたら、あんな会社からお給料なんてもらっても、ご飯が喉を通らんよ。」

杖をついた七十歳くらいの老婆が冷たい言葉を吐き捨てた。それを皮切りにあちらこちらで

「自分の家族が同じ目にあっても、あの仕事を平気な気持ちでできるのだろうか。」

「どうせ他人事なんだよ。わしらのことなんて、なんとも思っていないんだよ。」

「きつと早く帰れとでも心の中で思っているんだよ。」

尖った言葉が佐伯に投げかけられた。正直佐伯も

「うるさいなあ。俺に八つ当たりするなよ。」

と心の中で毒を吐いていた。

献花台には多くの花が整然と並べられ、神聖な線香の香りが漂う。この場所だけ時が止まっているかのように生暖かい風が吹いた。自分の家族が同じ目にあつたら…。その言葉が佐伯の心にひっかかっていたようだった。

「家族か…。」

「俺には無関係だな。」

その言葉とは裏腹に佐伯の横顔には少し寂し気な表情が浮かんでいたのは何故だろうか。ポツツ、ポツツ。

佐伯の被っているヘルメットに雨粒が当たる音がした。その音はやがて大きくなり、辺は雨霽にうたれ色濃くなっていた。

線香の香りが消え、コンクリートが雨に濡れ、ムツとした匂いが広がりはした。遺族の人々はゆっくりと献花台のあるテント下へ移動していった。佐伯は雨足が強くなるうが変わらず同じ場所でじつと立ち続けた。

何故だろう。別に移動しても問題ない場所にテントはあるにもかかわらず…修行増が滝に自ら打たれに行くような、そんな重苦しい姿で佐伯はその場所を一步も動こうとはしなかった。それは遺族に向けてのポーズなのか？それとも…。

最近、男の会社内の空気が何故か重い。業績が好調の時は様々な部署で意見が飛び交い、訪問してくる得意先からの来客も多い。ところがここ最近はどうだろう。妙に静かなのだ。そして役員やメインデザイナーの面々が幾度となく会議を行っている。それも完全シャットアウト状態で。お茶くみの女子社員も入室を禁止されていた。

メインのデザイナーに男の名はあるはずなのに会議には呼ばれなかった。イヤな予感が走る。それでも山のようにたまっている仕事を黙々とこなしていた男だった。

それから何日も経たないうちに男は役員室に呼ばれることとなった。いやな予感は的中していた。

先日ゴーサインの出た広告デザイン。その不動産会社のロゴを、旧タイプのものを誤って使用していたことが判明したのだった。それはデザイン段階がロゴ変更時と重なっていたため、まだ新しいロゴが手元に届いていなかったのだ。そこで旧デザインを一旦使用し、新しいロゴが手元に届き次第差し替えるという手はずだった。それが何かの手違いで、得意先に古いほうのデザイン案のデータが送られてしまったという訳だ。これはあつてはならないミスだ。

得意先の不動産会社は大得意先でこの仕事のミスは、男の務める会社にとってどれ程のマイナス要因であるかは一目瞭然であった。役員室の中はその男に全責任を負わせ解決しようという思惑でいっぱいであった。ほんの少し前まで肩を並べて仕事をしていた仲間達が他人のように遠く思えた。

男は反論することもなく役員室を出た。

「何故だ。何故誰も俺を守ろうとはしてくれないんだ。仲間だと思っていたのに……。信じていると言ってくれていたのに……。」

今までの自信に満ち溢れ輝きを放っていた男の姿は、もうどこにもなかった。

それからの男の生活は一変した。家族にも辛く当たった。妻が慰めの言葉をかけようとしても

「仕事を辞めたただの主婦のお前に、何が分かると言うんだ。」

ただの八つ当たりを繰り返すばかりだった。それでも妻は

「私と息子はいつでもパパの味方なんだから何でも話してよ。」

と、ずっと男を見守り続けた。それが一段と男には辛かったのだろう。

「お前に話したところで何が変わるといふのか！」

守るべき妻や息子に慰められている自分を認めたくない気持ちだが、彼をそうさせた。これも俺の気持ちなど分かってくれないという孤独感が男を包んでいた。

そして天職と思っていた仕事も辞めてしまった。酒も日に日に量を飲むようになっていった。そして数か月が経った頃、生活が傾きだし、息子の生活にまで悪影響が出始めていったのだった。優しかった妻も次の仕事を探すように何度も男を促すようになっていった。「結局そこか！金か？金が稼げなくなった俺にはもう用がないってことか！」

そして家族に向けて決して言っただけではない言葉は男は口にしてしまったのだった。

「お前達さえいなければ！身軽で、俺はこんなに苦しまなくて済んだんだ！何もかもお前たちのせいだ！」

妻は一瞬だけ悲しい表情を浮かべたが、すぐに母親の顔に戻った。これ以上息子に男の言葉を聞かせてはいけないと、優しく息子を抱きかかえ部屋を出て行った。

妻の顔に咲いたあの美しい花は、その華やかさを失い、寂しく枯れ散っていった。男は全てをなくした。あの暖かな土曜日も。あの愛らしい息子の笑顔も。あの穏やかな妻との時間も。広いリビングが一段と男の孤独を色濃くさせるだけであった。

佐伯が現場に立ち始めて一年が過ぎた。相変わらずここを訪れる人たちからは、冷たい視線を浴びていた。ただ『無』になることを覚えた佐伯はさほど気にならなくなっていた。「立っているだけで給料がもらえるんだ。そう思えば楽なもんさ。俺にはピッタリの仕事」
「ん。」

そんな佐伯の背後から声が投げかけられた。

「また文句かい？それとも嫌みかあ？」

振り向くと、そこには、老婆が立っていた。ここに立った初日に棘のある言葉をかけてきたあの老女だった。佐伯は

「柏木のおばあちゃんか。」

と心で呟きながら愛想笑いで答えた。

「はい、なんでしょうか？」

ぶっきらぼうに返事をする佐伯。

「あんたは、いくつになるんだ？」

「え？あ、僕ですか？」

いきなりの質問に少し焦った佐伯だった。

「えくと、今年で45になります。」

「そうか、やっぱりそうか。それくらいだと思ったよ。」

「あ、はい。」

会話はそれきりプツリと途切れた。佐伯は柏木のおばあちゃんの突然の問いかけの意味が理解できずあつけにとられていた。そんな佐伯を尻目に、いつものように達筆な字で書かれた手紙と綺麗な花束を供えて柏木のおばあちゃんは帰っていった。

「そうそう、あのおばあちゃんの名前は、この封筒に書かれた名前を見て柏木さんって知ったんだっけ…。」

と、おばあちゃんが帰った後、風で飛ばされないように、手紙を丁寧に、花束を包んでいるフィルムにテープで張り付けながら佐伯は呟いた。

こうやって遺族の人達の顔や名前を無意識に覚えるほどになっていた。そして、遺族の人達が亡くなった人へと書いた手紙が、風の強い日などに、あちらこちらに舞い散り飛んでいってしまうのを、見て見ぬふりをするのが心苦しくなっていた。それからというもの佐伯は、自前でテープを用意し、こうやって飛ばされないように張り付けているのだった。

「柏木のおばあちゃんは、誰に手紙を書いているのだろうか？」

佐伯が現場に立ち始めて二年半が過ぎた。今日は朝からシンシンと雪が降り続いていた。

「今日は凍えるくらい冷え込むなあ。」

「さすがに今日の月命日は来る人は少ないだろうな。」

そう思っていた矢先、小学校低学年くらいの息子の手をひいた母親がやって来た。ター君親子だ。献花台のある場所からは少し離れた場所で手を合わせるのが彼女たちの定位置だった。今日は現場に向かって何かを広げて見せていた。母親は目に涙を浮かべながら、線路に向かって話かけていた。

「亡くなったのは、あの息子の父親だろうか？」

ふと息子の方に目をやると、しっかりと目が合ってしまった。すると積もった雪に足をとられながら、小さな足を懸命に動かしこちらの方へ駆けてきた。そして佐伯の側に到着すると、その大きな瞳で見上げながら

「ねえ、ねえ、おじさん、聞いてよ。僕ね、学校のマラソン大会で一等賞を獲ったんだよ。」

「50メートル走は、ぜんぜん早くないんだけどね。マラソンはぶつちぎりで一等だったんだよ。」

佐伯は思わず

「すごいじゃないか！一等賞なんて、なかなか獲れるもんじゃないぞ。」

と、頭を撫でてしまった。びっくりした母親がこちらに向かって走ってきた。そんなことはおかまいなしにその息子が話しを続けた。

「僕がマラソン得意なのはね、お父さんと同じなんだって。お父さん、マラソンを走るお仕事していたんだって。」

話終えると同じくらいに、母親が到着した。

「ター君、何、おじさんに話しているの？お母さんの側を勝手に離れちゃダメっていつも言っているでしょ！」

母親は子供が自分の側を離れたことを叱かっている言葉を発していたが、佐伯には、こんな自分と話をしていることを咎めた言葉に聞こえた。

「あ、すみません。」

佐伯がそう言うと

「いえ、こちらこそすみません。」

と母親は答えた。その手には息子が学校でもらってきたであろう一等賞の賞状があった。それを父親に見せに来たのだろう。

「ねえ、この賞状をお父さんのところに置いていったらダメ？」

息子が母親に甘えた声でたずねた。

「いいけれど、ここに置いていくとター君は見られなくなるよ。いいの？」

「いいよ。だってお父さんに、僕もマラソン頑張ってるってこと教えてあげたいし。見ていて欲しいし。」

佐伯はその親子の会話を静かに聞いていたが

「それ、置いていけますか？」と口を挟まずにはいられなかった。

「そのままだとあれなんで、これに入れられてはいかがですか？」

と、とっさに自分の来月の勤務表の入っていたクリアファイルを母親に差し出したのだ。った。

「え？あつ、でも…。」

戸惑う母親を気にすることなく息子の手がそのクリアファイルを受け取った。

「おじさん、ありがとう。」

息子からクリアファイルを手渡された母親はその中にそつと賞状を入れた。

佐伯は手紙などを張り付けるために持っていた幅広のテープで回りをしっかりと囲い「これで雨風も大丈夫。」と笑った。「これでいつでもお父さん、僕の賞状見られるね。」

と息子も嬉しそうに母親に笑いかけた。母親も視線を少しそらしてはいたが、佐伯に深く頭を下げた。

「おじさん、また来年も僕、一等賞獲るよ！」

小さくなってゆくター君親子の背を見送りながら「頑張れよ。」と佐伯は心の中で優しく呟いたのだった。

夫と別れて、住んでいた高層マンションから格安の市営住宅に移り住んで三年になっていた。母と子二人だけの生活も、ようやく落ち着きを取り戻していた。

母親は昔の仲間に仕事を紹介してもらおうことができ、小さい事務所ではあるが、デザインの仕事に復帰することができていた。

ただ長いブランクの間に、デザインソフトが何度もバージョンアップを繰り返していた為、同じ仕事を一回りも年下の上司が、スイスイとこなす姿を目にすることになり、自分が社会からどれ遠ざかっていたのかを、嫌というほど思い知らされる毎日であった。

息子は小学三年生となり、いつかの愛らしさはそのままに、男の子らしいたくましさも育っていた。

「あの子がいるから私は頑張れるのよ。もし私一人だったら、どうなっていたか分からないわ。」

いつも負けそうになった時には、息子の笑顔を思い出し踏ん張ることのできる母親であった。

「学童のお迎えの時間だわ。でも、今日もう少し進めておかないと、明日の期日に間に合いませんわ。」

焦れば焦るほど仕事が上手いかわからないことを、もう充分理解していた母親は携帯電話を手にした。

「ごめんなさい。今日、学童から一緒に連れて帰ってもらえないかな？あの子、カギは持っているから…。うん。ごめんね。この埋め合わせは必ず…。本当にごめんなさい。では

よろしく願います。」

苦渋の選択で同じ市営住宅に住む、息子の同級生ママへ息子のお迎えを託したのだった。このママも一人で子供を育てている、いわば戦友であった。その為、本当はこんなことを頼みたくなかったが、どうしてもその時はお互い様ねと、助け合っている大切な存在であった。

二年前に夫を亡くした彼女とは少し立場が違っていたが、悩みは共通していた。働きなから母一人で子供を育てる苦労や、これからの生活の不安、そして父親不在の家庭の中でどう子供と向き合っていくのかなど、話はずきなかった

「お母さん、おそい！お腹減ったよ。学童でおやつ食べてから、何時間たつてると思ってるの？」

息子がふくれっ面で、でも甘えた声で母親に夕食をせがんだ。どんなに仕事で疲れて帰ってきてても、この子のために作る料理は楽しかった。

「じゃあ、サツと食べられる丼ものにしようか。何がいい？」

「甘い、マーボー豆腐をご飯につけているやつがいい！」

息子の大好物だった。昔、辛いものが苦手な夫のために、味噌に砂糖を多めに加え、辛料は一切使わない、お子様風麻婆豆腐を作ったところ、とかく息子にも好評だった。

「ご飯を食べる時はテレビを消しましょうね。今日学校でどんなことしたのか、お母さんに教えてよ。」

こんな時間が何より心安らく時間だと、息子の顔のエクボを眺めながら微笑む母親であった。

次の日の土曜日の朝。今日は午前中だけの出勤の日。息子のお昼ご飯を、お弁当にして持たせて学童に連れていく必要がある。

「何やつてるの？早く鞆にお弁当と水筒と、学童でする学校の宿題を忘れず入れなさいよ。」

「この前、宿題持つて行くの忘れたでしょう。ダメよ。忘れたからやらなくていいや、は。」

朝はいつも戦争だ。それなのに息子は何故か今日はグズグズしている。母親は少しイライラしながら、台所から出てリビングの息子の様子をうかがった。息子の姿を見た瞬間、母親は息をとめた。

それは見てはいけない姿だと感じ、見ていないふりをするためであった。息子は、いつもより多く挟み込まれた新聞の折り込み広告を一枚ずつ丁寧に確認していたのだった。

まず、スーパーや電気店などのお店の広告は左へ。そして不動産、新築マンションの広告は右へ。そして右側に分け置いた広告に、再度一枚一枚ゆっくりと目を通していった。時折首をかしげながら

「違うなあ。」

「これは…。うん。多分違うな。」

「なんでだろうなあ。なんでないのかなあ。」

それは夫と離れて暮らすようになってから、一度も『パパ』という単語を口にしなかった息子の心内が伝わってくる行動であった。

母親は涙をグッとこらえた。

「忘れてるわけないか。きっと私に気を使って父親のこと話題にしなかったんだよね。それに甘えて、私は…。」

「あの子の中ではパパはまだ、ヒーローなんだよね。」

息子の気持ちにずっと蓋をさせていたのが自分だと気づき、思わず母親は声を出してしまった。振り返った息子は

「あ、お母さん。なんか土曜日って広告がいっぱい入っているでしょ。見にくいからさ、スーパ―やお店の広告を分けておいたよ。はい、これ。」

と言って、息子はなんの焦りもなく左側に分け置いた広告の山を母親に差し出したのであった。その堂々とした態度が、ひどく母親の胸を痛めた。

「父親のことなど、とつくに忘れてるから心配しなくていいよという演技を、もう長く私の前でしてきたんだわ。こんな小さい子供にそんなむごいことをさせていたなんて…。」

母親は今日の午後からの予定を変更して、ある場所に息子と一緒に出掛ける決心をした。強い覚悟を胸に…。

「結局、四年目も俺かよ…。」

半分ふてくされながら、それでもこの場所に立つ仕事というものに、だんだん意味を見いだしている佐伯であった。当初社長から頼まれた期間は三年。そのうちにちゃんとした警備の者を雇うという話であったにもかかわらず、いつの間にか、自分の経理の椅子には、若い女の契約社員が座っていることを佐伯は知っていた。

「あの社長。警備雇わず、経理雇ってどうするんだよ。俺の帰る場所無くなってしまったじゃないかよ。」

ここに立つようになって独り言が増えた佐伯であった。

「こんにちは、いつもご苦勞様です。」

ハッキリとした低音ボイスの高橋さんだった。年は60歳くらいか。いつもきつちりとしたスーツスタイルで、どこか立派な会社の役員にも見える。

「あ、高橋さんこんにちは。あれ、今日の花束は一段と豪華じゃないですか。」

高橋さんが胸に抱えていた花束がいつもとは色合いも違い華やかであった。

「あ、これですか？実は私今日で定年を迎えまして。会社の部下からのお祝の花束なんです。」

「え、定年なんですか？それは長い間お勤めご苦労様でした。」

佐伯はなんでこんなありきたりの言葉しか俺は用意できないのだろうと、自分のボキヤブラリーのなさを嘆いた。

「いやねえ、まずは時枝に報告をと思ひまして。」

時枝さん。高橋さんの最愛の奥さん。二人には子供はなく、ずっと二人で穏やかな生活を送られていたと聞いた。それがあの事故で…。

「時枝はあの時珍しく電車に乗って買い物にでかけたらしく…。」

「なんでだろう？ってずっと不思議に思っていたんですよ。でも最近その謎が解けました。時枝のお友達から教えていただいたんです。そのお友達も、私にそのことを伝えるべきかずっと悩まれていたらしいんですが、私が知っておいたほうがいいと考えられたらしく、お手紙を下さいましてね。」

佐伯は聞き入った。

「あの事故の一週間後が私たちの結婚30周年記念の日だったらしいのです。恥ずかしながら私はそんなことには全く気付いておりませんでした。でも時枝はやはり女性ですね。そのお祝にどこかへ食事に出かけようと計画していたらしいのです。で、お友達に相談したところ、たまにはおしゃれをした方がいいわよ。とでも言われたのでしょうね。百貨店に洋服を買いに行ったみたいなんです。ま、結局お店には行けなかった訳ですが。」

「そこまで話すと高橋さんの瞳から涙が零れ落ちた。」

「おしゃれなんてねえ。いい歳して。そんなこと…。」

佐伯は高橋さんの声を遮った。

「そこは、そう言っちゃダメですよ。いくつになっても女の人はね…。」

「でもねえ、佐伯さん。私は化粧していない時枝しか思い出せないんですよ。あいつがきれいに化粧してオシャレしている姿なんて想像もつかないし、記憶のどこにもないんですよ。もし、今生きていたら、きれいな姿で私の定年退職をお祝してくれていたのでしょうか？」

佐伯はその言葉に反応しある衝動に突き動かされていた。

「ちよつと待っていてください。」

足早に自分のバック置き場に戻り、紙とペンを手にして高橋さんの前に戻ってきた。

「奥さんの写真ありますよね。見せて下さい。お願いします！」

「私の立場でこういうことどうかとは思いますが、でも是非描きたいんです！」

「は？描く？」

高橋さんは不思議そうな表情を浮かべながら、財布の中から写真を取り出した。すると佐伯は持っていた紙を地面に置くと、油性マーカーですると何かを描き出した。

それはしなやかな美しい黒髪を風に揺らしながら、うすいブルーのワンピースを着て歩く、品のいい化粧を施した女性の姿であった。その女性の浮かれた気持ちが伝わるかのよ

うにスカートの裾は緩やかに揺れていた。

「時枝だ！これは間違いなく時枝だ！まるで生きてるようだ！」

大きな声にびっくりして、他の遺族の人たちもこちらを見た。それでも佐伯はペンを止めなかった。

「高橋さん、奥さんのきれいな姿を忘れたなんて言わないで下さいよ。きっと奥さんも、長い間お勤めありがとうって、笑顔で今日の目を迎えられていますよ。こんな風に。」

どんどん絵の中の時枝さんに命が吹き込まれていった。涙を流し喜んでいた高橋さんはいつの間にか笑顔となっていた。

「私ね、今の会社に再就職のお話いただいてのに断ってしまったんですよ。時枝にこれじゃあ、怒られてしまいますね。もう一度チャンスをもらえないか会社にかけてみます。」

そう言うとき高橋さんは胸をはり、手にしていた花束を供えると、写真と佐伯の描いた時枝さんを胸に抱き、悠々と歩きだしたのであった。

「行ってきます！」

五年生になった息子は毎週土曜日にパソコン教室に通っていた。四年生の時に行われた二分の一人式が彼を変えていたのだった。あれがやりたい、これがやりたいとのわがままなど一切口にしなかった彼がその式典で読んだ作文で初めて自分の思いを口にした。

「ぼくはずっと自分の思いをお母さんに内緒にしてきました。でももうやめになります。お母さん。ぼくは大きくなったらお父さんやお母さんと同じ仕事がしたいです。沢山のの人に幸せな、心があったかくなるような気持ちを届けられる仕事がしたいと思っています。もしかししたら僕がそういうことを言うと、お母さんが嫌な気分になるかと思ってずっと言わずにいました。僕は小さいころお父さんの仕事ってすごいなって思っていました。そして、僕が小学校に入ってからお母さんが仕事をやりだしたら、なんとビックリでした。お母さんもお父さんと同じ仕事をしていたからです。でもお母さんは言いました。この仕事は時間も多く使うし、お家にもなんんだかその仕事のことばかり考えてしまうし、お給料も良いときもあれば悪いときもあるから、僕にはもつと安定？した仕事を大人になったらしてほしいって。例えば公務員？とかだって。よく分からないけれど、そうなんだ、お母さんイヤな仕事しているんだ、かわいそうだなって思っていました。でもこの前お母さんの会社の人たちで作った、新しく駅前にできた保育園のパンフレットをお母さんと一緒に見ました。その時お母さんが言いました。『この場所で楽しく小さい子供達が過ごしてくれたらいいなあ。そうすれば、預けるお母さん達も安心してお仕事に行けるから、この場所がみんなのオアシスになりますように…』と、思ってたこのパンフレット作ったんだよって。』笑っ

ていました。なんだ、お母さんはイヤな仕事をしているってウソだったんだ。やっぱり好きな仕事をしているんだと僕は思いました。だから僕も同じ仕事をしてみたいです。絵はなかなか上手に描けないけれど、パソコンをつかってするデザインをやってみたいと思います。だからお願いします。月謝は一万円くらい？するかもしれないけれど、パソコン教室に通わせて下さい。」

母親は顔から火がでるくらい恥ずかしくなったことを思い出し笑いしながら息子を見送った。そして部屋に戻ると、息子が机の引き出しに隠し持っていた沢山のパソコン教室のチラシを

「まあ、よくこれだけ集めたもんだわ。」

と眺めながらパチンとチラシを指ではじき、また引き出しを元に戻した。

「小学五年生で贅沢な習い事なこと。私なんて大学生になってから初めてパソコンを触ったっていうのに。今の時代の子供はいいわよね。」

母親はなにやら愚痴ばかりを言っているようにも思えるが、表情はずっと緩んだままであった。通い始めて半年と少しであったが、息子の上達は目を見張るものがあった。教室のコースも子供向け教室ではもの足りず、大人のビジネスデザインのコースに変わっていた。

今の小学校ではパソコンに触れさせる機会を多く設けていて、もちろん息子はパソコン係であった。当日の給食のメニューを、一か月の献立表から導き出して毎日給食の時間にモニターに映し出したり、クラスメートのお誕生日には、パソコンを使ってメッセーボードを制作し、プレゼントをしたりと、大活躍であった。

「いつか私、あの子に追い抜かれるわ。」

と呟く母親表情は緩みっぱなしであった。

一年半ほど前から現場の様子が少し騒がしくなった。それは事故の教訓としてこの現場をある程度保存するべきか。それとも遺族感情を考えたいうえで、更地にして慰霊碑などを建てるのかという問題が持ち上がった。

それとは別に、騒がしくなっている原因があった。それは二年ほど前の佐伯の行動が引き金となっていた。奥さんの顔を忘れそうだった高橋さんの姿に心を突き動かされ、一心不乱に佐伯は似顔絵を描いた。その絵があまりにも美しく、今にも動き出しそうな絵であったため、その場所に居合わせた他の遺族の人たちの間で噂になっていた。そしてそれからというもの、佐伯に写真を見せ似顔絵を描いてくれないかと、遺族の人たちが度々頼み込むようになっていった。

始めは一日に一人二人であったが、その数はどんどん増え、警備の仕事に支障がでる人

数になっていった。その為佐伯は、自分の休日の曜日を遺族の人たちに伝え、その日に警備としてではなく、絵を描くボランティアとして活動していた。佐伯と顔見知りの遺族の人たちにとって、絵を描いてもらうのと同時に、自分の近況報告であったり、まだ癒えぬ悲しみのはけ口であったり、それはとても貴重な時間となっていた。

「私はもう、忘れようと思うんですよ。忘れないと前に進めない気がして。」
ある遺族が口にした。

「忘れるっていうのにも色々あると思うんですよ。記憶すべてを消しさるのか？それとも記憶は大切にしまっておくのか。記憶に今の自分が甘えてダメになりそうなら大きめのカギをかけておくんですよ。そして閉めた鍵を心で握りしめて、自分の心の中にはこんな大切な存在があるのだからお守りにするんですよ。記憶すべてを消すっていうのは寂しいじゃないませんか。それに消したくても消せはしないと思うんですよ。だから忘れる時があることは許してもらいましょうよ。例えば、テレビでお笑い見るじゃないですか。笑ったりできる心境じゃない時もそれが面白ければ思わず笑ってしまうでしょ？そしてその笑った瞬間って悲しい思い出は忘れてるじゃないですか。その時間を少しずつ増やしましょうよ。それが今を生きている人間の本来の姿だと思いませんか？僕はそう思います。」

またある遺族がこんなことを口にした。

「なんかあの事故から私を知る周りの人たちが腫物に触る様に私に接してくるんですよ。悪気がないのは分かっているんです。でもそうされると私はずっと悲しんでいなければいけない人みたいです。だから最近、私のことを知らない人と会いたくなるんですよ。あ、それで佐伯さんに愚痴聞いてもらっているって感じなのかな。」

佐伯は茶化したように
「そうですね、こんなどこにでもいるオッサンで良ければいつでも話にきたらいいじゃないですか。その代り私は遠慮なんてしませんよ。あなたに貸し借りなんてない関係なんだから。でもね、あなたの周りの人はあなたを腫物だなんて思っていないと思いますよ。ただ大切な家族を突然奪われたあなたのとてつもない悲しみが、自分の理解を超えてしまっているため、戸惑っているだけなんだと思いますよ。そして、自分にとって大切なあなたが、自分の何気ない言葉や態度で、今以上に傷つくことを恐れて、そういった接し方になっただけだとね。それだけあなたのことを大事に思ってくれているとは考えられませんか？」

この佐伯という人間は優しいのか、冷たいのか？真面目にやっているのか、ふざけているのか？今日も相変わらずで

「せっかくの休日までこんなことをやっている俺は、いつ休めばいいんですかね？」

などと愚痴を言っていた。でもその言葉とは裏腹に、このボランティアを辞めようとはしなかった。それは自分の寂しさを埋めているようにも思えた。

「佐伯さん、家族は？」

息子の絵を描いてもらいに来た女性が問いかけた。

「いや、見ての通り気楽な一人もんですよ。」

「じゃあさ、今日は私が弁当作ってきたからさ、あんたこれ食べなさいよ。どうせろくな食事してないんだろう？」

「あ、ばれていました？じゃ、ありがたくいただきますかな。」

丁度お昼の食事時となった為、佐伯は差し出された手作りのお弁当に箸を付けた。人の作るお弁当など何年ぶりに食べたのだろう。ありがたいやら、あったかいやらで、佐伯の心は静かに震えていた。そして、アルミに包まれたそのおかずを口にした瞬間、佐伯の瞳から溢れんばかりの涙がこぼれたのだった。

「これ、辛いよ…。」

佐伯は上ずった声で思わずその場を誤魔化す言葉を口にした。

「そうかい？そんなに辛くはないと思うけどね。あ、それね、昨日作ったマーボーが残ったからさ、パンにつけてチーズと一緒に焼いたんだよ。マーボー味のピザ風トーストさ。ばあちゃんにしてはシャレたもん作るだろ？」

佐伯の涙は、まだ止まらない。

「なんだい、涙出るくらい辛かったのかい？」

佐伯は何度も辛い辛いと言いながら、零れ落ちる涙を拭こうともせず、食べ続けていたのだった。

その様子を遠くの方からじっと見ている二人の影があった。季節柄卒業式帰りの親子に見えた。息子の方は母親の身長をとうに超えている長身であったが、見るとまだあどけなさが残るその顔には小さなエクボがあった。立派なスーツ姿の小学生で、その顔立ちはどこか佐伯に似ていた。

母親は春物の淡い色のワンピースがまだ少し肌寒そうに見えたが、どこか凜とした立ち姿だった。息子が何か母親に同意を求め、母親がゆっくりとそれに頷いた。その後、一歩二歩、息子の足は真っ直ぐと佐伯の方に向かっていった。その手には卒業証書らしきものと、もう一つ…。パソコンで作られたと思われる立派な広告があった。その広告にはこう書かれていた。

『築35年。駅から徒歩20分の格安市営住宅。

決して広くはありませんが、陽当たり良好。

三食の温かいご飯付き。

入居の条件として、今年中学校に入学する長男に絵を教えること（気長に…。）

そしていろんな人に笑顔をもたらす仕事をしていると胸を張って言えること。

あなたもこの場所で第二の人生を始めてみませんか？

この広告を手にした今がチャンス！売り切れ必至。お急ぎ下さい♪』

まだ冷たい春の風が、幸せ運ぶその広告を、ゆっくり、ゆっくりと優しく揺らしていた。

《完》